

キリストの地上再臨の有様とその目的



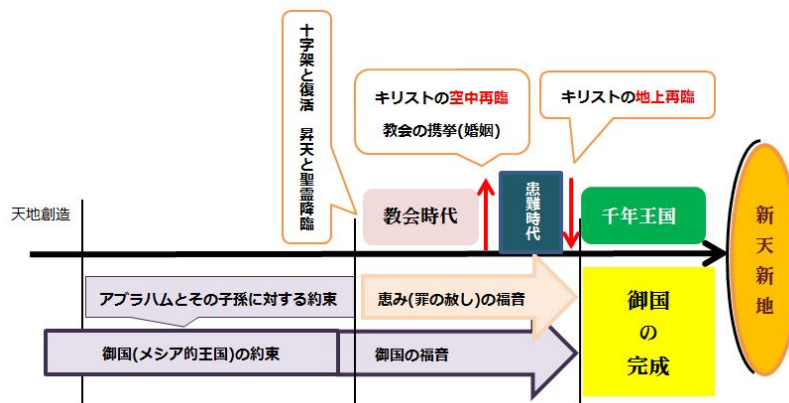
「見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。

地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。」(【新改訳 2017】黙 1:7)

ベレーシート

●これまで三回にわたって「キリストの空中再臨と教会の携挙」について学びました。キリストの再臨は、「空中再臨」と「地上再臨」があるということです。前者の再臨はなんの前ぶれもなく起こり、キリストが花婿として花嫁なる教会を迎えるために天から来られます。そのとき教会は一挙に引き上げられ、花婿なるキリストと空中で会い、婚姻(婚礼)をして、天の父の住まいで蜜月の時を過ごします。その間、地上では七年間におよぶ、反キリストとも呼ばれる「獣」の支配による患難時代があります。それはかつて誰も経験したことのないほどの恐ろしい苦難の時です。しかし主は、地上にいる神の民(イスラエルの民—ユダヤ人)を、「獣」の軍隊から救うためにこの地上に来られます。そのときがキリストの地上再臨です。そのときキリストは一人で来られるわけではありません。ゼカリヤ書 14 章 5 節に預言されているように、「**すべての聖徒たちも、主とともに来る**」のです。

●今回は、このキリストの地上再臨のことについて学びます。キリストの地上再臨については、空中再臨以上に、聖書の多くの箇所に記されていますが、その時はいったいどのような姿で再臨されるのか。またその目的とはいったい何なのか。そうしたことを、今回、共に学びたいと思います。地上再臨の前にはどんな前兆があるのか、どんな出来事が起こるのかということについては、次回で触れたいと思います。大雑把な形でキリストの地上再臨の前後の出来事を見てみたいと思います。以下の図をご覧ください。



●図をご覧くださいと分かるように、中央の位置に、イエシュアの十字架の死と復活の出来事があります。そして復活されたイエシュアが天に帰られた後に、約束の御霊が降り注いで教会が誕生します。私たちはその時代の中に生きているわけです。「教会時代」は旧約時代の人々にとっては「奥義」でした。つまり、旧約の預言者たちには誰にも啓示されなかったのです。その「奥義」は使徒パウロによって明らかにされました。その「教会時代」もやがて終わりを迎える時が来ます。しかしそれはあまりにも突然で、教会は一瞬にして天に引き上げられます。それがキリストの空中再臨です。これまでも、そのことについて三回にわたって学んできました。なぜ、教会が擧げられるのかと言えば、教会が反キリストとも呼ばれる「獣」の支配による患難から守られるためです。この「獣」はイスラエルを騙して自らを真のメシアだと思わせます。最初は彼が和平関係を樹立することで、イスラエルの民(ユダヤ人)は、エバがサタンに騙されたように簡単に騙されてしまいます。やがてこの「獣」はその本性を顕わにします。そのため、この時点で信仰を持つことは殉教を覚悟しなければなりません。七年間の患難時代では多くのことが起こります。その出来事はすでに「ヨハネの黙示録」に明示されていますが、このことについては日を改めて学びたいと思います。

1. キリストの地上再臨の有様

●キリストの地上再臨の前後にはいろいろなことが起こります。少しずつ、学んでいきたいと思いますが、今回取り上げることは、第一に、キリストはどのような姿で再臨されるのか、その**有様**について学びたいと思います。第二は、キリストの地上再臨の**目的**です。

(1) キリストは見える姿で地上に来られます

●イエシュアは、終わりの日に起こることとして弟子たちに、「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」(【新改訳 2017】マタイ 24:30)とされました。またイエシュアは、不当な裁判で、「おまえは神の子キリストなのか、答えよ。」と尋問する大祭司に対してこう答えました。「あなたが言ったとおりです。しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」(【新改訳 2017】マタイ 26:64)と。イエシュアの言われた「人の子」とは、旧約におけるメシア的称号です。

●このように、地上再臨されるキリストは**見える姿で来られます**。それゆえヨハネはその黙示録の中でその方を「**見よ**」と喚起しています。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 1 章 7 節

見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。

(2) キリストは雲に乗り、雲とともに地上に来られます

●イエシュアが昇天される時、イエシュアは弟子たちが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなりました。弟子たちが天を見つめていると、白い衣を着たふたり(御使い)が彼らのそばに立ってこう言いました。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」と。ここでの「見たのと同じ有様」とは、雲に包まれたイエシュアの有様であり、その有様で「またおいでになる」ということです。地上再臨のキリストは、だれの目にも見えるのですが、空中再臨による携挙の時には、一瞬のうちに携挙された者だけが空中の雲の中で主を見ることとなります(I テサロニケ 4:17)。ただ、「雲に包まれている」姿は、空中再臨の時であろうと、地上再臨の時であろうと共通しているのです。

●ヨハネの黙示録 1 章 7 節には、「見よ、その方は雲とともに来られる。」とあります。ちなみに、新改訳改訂第三版では「見よ。彼が、雲に乗って来られる。」と訳されていました。他の箇所を【新改訳 2017】で見てください。

①マタイの福音書 24 章 30 節「人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」

②マタイの福音書 26 章 64 節「・・そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」

③マルコの福音書 13 章 26 節「そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。」

④マルコの福音書 14 章 62 節「・そして、天の雲とともに来るのを見ることになります。」

⑤ルカの福音書 21 章 27 節「そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」

⑥ヨハネの黙示録 14 章 14 節「また私は見た。すると見よ。白い雲が起り、その雲の上に人の子のような方が座っておられた。」

●「天の雲のうちに」とか、「天の雲とともに」とはどのようなことなのでしょう。その前に、そこに使われている語彙に注目したいと思います。「雲」という名詞の前にある前置詞の原語を調べてみると、以下のようなことがわかります。ただしここではギリシア原文ネストレ第 27 版のものです。しかし新改訳 2017 ではネストレ第 28 版が使われているので、少し変更されているのかもしれませんが、以下は第 27 版の情報です。

①マタイ 24 章 30 節・「エピ」(ἐπί)。その並行記事のマルコ 13:26 とルカ 21:27 は「エン」(ἐν)。

②マタイ 26 章 64 節・「エピ」(ἐπί)。その並行記事であるマルコ 14 章 62 節では「メタ」(μετά)。

③黙示録 1 章 7 節・「メタ」(μετά)。

●前置詞の

「エピ」(ἐπί)は、本来、「～の上に座して」という意味。

「エン」(ἐν)は、本来、「～の中に、～に包まれて」という意味。

「メタ」(μετά)は、本来、「～と共に、～を伴う」という意味。

●上に掲げた聖書箇所では、前置詞がみな異なっているにもかかわらず、新改訳改訂第三版、新共同訳、口語

訳が、一様に「雲に乗って」と訳しています。キリストの再臨のイメージは、このようにみな「雲に乗って来られる」というイメージで一致して翻訳されているのは不思議です。「雲に乗って」というと、どうしても孫悟空のイメージです。しかし、新改訳 2017 の「雲のうちに」「雲とともに」「雲の上に」というイメージは、「雲に乗って」というイメージよりは、神の栄光に包まれてというイメージになります。しかも、ルカを除いて、「雲」はみな**複数形**なのです。これはどういうことでしょうか。

●新約聖書では「雲」(ギリシア語では「ネフレー」νεφλη)という語彙が 25 回使われていますが、複数形で使われているのは、以下の 7 回です。マタイ 24:30、26:64/マルコ 13:26、14:62/ I テサロニケ 4:17/ユダ 1:12/ヨハネ黙示録 1:7。後の 18 回はすべて単数形です。「雲」が**複数形で使われる時には決まって(ルカを除いて、ルカの 21:27 だけはなぜか単数形で使っています)、キリストの再臨(空中も地上も同様に)のことに関係している**という事実です。「雲」を単数形と複数形を明確に区別して使い分けているのは、マタイとマルコ、そして使徒パウロとヨハネです。つまり、旧約の主のさばきを意味する「主の日」と関係する「雲」は、すべて複数形で使われているということです。ちなみに、イエシュアが変貌した箇所にある「光り輝く雲」は単数形です(マタイ 17:5)。

●「雲」ということばにこだわるのは、それなりの理由があります。というのも、旧約では「雲」は**神の臨在のしるし**だからです。エジプトから救い出されたイスラエルの民にエジプト軍が迫った時も、幕屋を建てたときにも、荒野を旅する時も、昼は雲の柱が、夜は火の柱が彼らを導きました。「雲の柱」も「火の柱」も、「**シヤハイナ・グローリー**」という**神の特別な臨在のしるし**なのです。ソロモンが神殿を奉献した時には、主の宮が栄光の雲(密雲)で満ちたために、宮で仕える祭司たちは立っていられなかったほどです。このように、雲は「神の栄光の顕現」を意味しています。

●黙示録 19 章 11~16 節におけるキリストの地上再臨の光景では、キリストは血染めの衣を着て、白い馬に乗り、真っ白で、きよい麻布を来た天にある軍勢がやはり白い馬に乗ってつき従っています。ここには「雲」についての記述はありません。このようなことを考えていくならば、「雲に乗って」とはだれもがそれと分かる、きわめて特別な栄光に満ちた神の臨在の光景を意味しているのかも知れません。それはある者たちにとっては救いをもたらす希望の光景であり、ある者たちにとってはさばきをもたらす恐ろしい光景に映るはずで

(3) キリストは天の軍勢(すなわち、キリストの花嫁)とともに地上に来られます

●黙示録 19 章 14 節の「天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた」に、再度、目を留めたいと思います。この節にある「**天の軍勢**」についての解釈です。この「天の軍勢」は、真っ白な、きよい麻布を来て、白い馬に乗って、彼につき従っています。ここに記されている「彼」とは再臨されるキリストのことです。黙示録 19 章 11~16 節ではキリストが、以下のことばで表現されています。

- ①「確かで真実な方」 ②義をもってさばき、③戦いをされる ④目は燃える炎のよう、頭には多くの冠(権威者としての冠)
⑤血に染まった衣をまとい ⑥「神のことば」という名で呼ばれる方 ⑦口からは諸国の民を打つための鋭い剣が出ている
⑧鉄の杖をもって民を牧する方 ⑨全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれる方
⑩衣とともに「王の王、主の主」という名が記されている

●だれもこの方に太刀打ちできる者はいません。地上のエルサレムに集結する「獣」の軍勢は、この天の軍勢を率いる方によって完全に敗北させられるのです。これが最終戦争と呼ばれる「ハルマゲドンの戦い」です。この戦いに参加する「天にある軍勢」とは、黙示録 17 章 14 節の「子羊とともにいる者たちは、**召されて選ばれた忠実な者たち**」のことで、つまり、これらは、クリスチャン、教会、「キリストの花嫁」のことを示唆しています。

●つまり、キリストが地上に再臨される時は、ご自身の花嫁をも連れて来られるということです。地上では、この後に「千年王国」が実現しますから、花嫁が天において、千年の間、花婿が帰ってくるのをじっと待っているとは到底考えられません。また主に仕える御使いたちも、当然、つき従って来ると考えられます。

2. キリストの地上再臨の目的

●これまで、キリストが地上再臨される時の有様、特に、「雲とともに来られること」と「天の軍勢を従えて来られること」について学んできましたが、次は、今回の「キリストの地上再臨」についての第二のポイントです。それは、キリストの地上再臨の目的です。すでに、このことについてもこれまでの説明の中に含まれていたのですが、今もう一度明確にするならば、再臨の目的を二つに絞ってお話しします。一つは、キリストが神の敵を鉄の杖をもって滅ぼし、神の国、天の御国、御国、王国をこの地上に打ち建てることです。もう一つは、この地上において、イスラエルの民も民族的に加わっての「子羊の婚宴」、ならびに、過越の祝いである大晩餐会が催されるということです。まず、第一の目的からお話ししたいと思います。

(1) 神に逆らう反キリストの支配を打ち破るため

●このことのために、御子イエシュア(黙示録では「子羊」(新改訳第三版では、単なる子羊ではなく、ギリシア語の「アルニオン」と呼ばれる勝利の「小羊」と訳されていました)が、サタンのひとり子、反キリストと言われる「獣」の軍勢を打ち滅ぼすために、「すべての聖徒たち」を従えて、地上(エルサレムの東にあるオリブ山)に来られるのです。

●反キリストと呼ばれる「獣」との戦いは、詩篇 2 篇にすでに預言されています。神の歴史のマスタープランを知って読むと大変良く理解できるのですが、それを知らずに読むと、まったくもってチンプンカンプンなの

です。

【新改訳 2017】詩篇 2 篇 1～9 節

- 1 なぜ 国々は騒ぎ立ち もろもろの国民は空しいことを企むのか。
- 2 なぜ 地の王たちは立ち構え君主たちは相ともに集まるのか。【主】と 主に油注がれた者に対して。
- 3 「さあ 彼らのかせを打ち砕き 彼らの綱を解き捨てよう。」
- 4 天の御座に着いておられる方は笑い 主はその者どもを嘲られる。
- 5 そのとき主は 怒りをもって彼らに告げ 激しく怒って 彼らを恐れおののかせる。
- 6 「わたしが わたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山 シオンに。」
- 7 「私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日 あなたを生んだ。』
- 8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまで あなたの所有として。
- 9 あなたは 鉄の杖で彼らを牧し 陶器師が器を砕くように粉々にする。』

●黙示録の 19 章 15 節に、「**鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である**」(2017 版)とありますが、すでに詩篇 2 篇 9 節にそのことが預言されています。いつの時代にも、そして今日においても、神に敵対する勢力は存在します。バベルの塔を建てようとしたときも、またイエシュアを十字架につけたときも、そしてやがてキリストの再臨前にすべての国民が神の民イスラエル(ユダヤ人)を攻撃するときも、地上の支配者たちは「主と主に油注がれた者」とに逆らうのです。

●6 節で「わたしが、わたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山、シオンに。」とあります。「わたし」とは、神のことであり、「わたしの王」とは神の代理者としての王のことです。旧約時代にはダビデ、ソロモンなど多くの王が立てられましたが、その多くの王が神の代理者としてのあり方に失敗しました。そこで、神は特別に「わたしの子」を立て(7 節)て、神の真の代理者としての王を立てられました。それが御子であり、神はやがて御子によってご自身が御父であることをあかしされます。詩篇 2 篇はそのことを預言しています。

●それゆえ、この詩篇 2 篇は「メシア詩篇」と呼ばれます。御父はこの御子に敵の審判をゆだねられます。御子は「鉄の杖(曲がることのない権威の杖)」でご自身の民を牧し、敵を打ち砕き、全世界を統治されます。その日は刻々と近づいています。勝利はすべて十字架と復活のみわざを通してなされましたが、この世において、それが目に見える形で実現するのはこれからのことです。シオンに立てられたメシアが、勝利をもって諸国を治め、世界を支配するという枠組みは、キリストの再臨によってもたらされる千年王国において実現します。そしてその実現が確実に迫っているのです。それゆえ神は、全世界のこの世の支配者たちに降伏を呼びかけ、御子に対する礼拝を呼びかけておられるのです。それが詩篇 2 篇の後半の 10～12 節の部分です。

【新改訳 2017】

- 10 それゆえ今 王たちよ 悟れ。地をさばく者たちよ 慎め。
- 11 恐れつつ 【主】に仕えよ。おののきつつ震え 子に口づけせよ。
- 12 主が怒り おまえたちが道で滅びないために。
御怒りが すぐにも燃えようとしているからだ。

幸いなことよ すべて主に身を避ける人は。

●「悟れ」(目を覚ませ)、「慎め」(教えを受けよ)、「恐れつつ主に仕え、おののきつつ震え、子に口づけせよ」と呼びかけます。昔、中近東では、支配者に対する忠誠と従順を表わす行為として、足に口づけしたようです。「子に口づけせよ」とは、御子を礼拝するようにとの招きです。それは、主の怒りから免れるために、自らの道で自滅しないように、神の代理者である御子を礼拝することを呼びかけておられるのです。

(2) 千年王国において催される、主の真実を記念する食卓(晩餐会)のため

●キリストの地上再臨の目的の第二のことは、神の真実を記念する主の食卓(晩餐会)が催されるということです。地上で子羊の婚宴が催されるとき、そこに大患難時代を通過してイエシュアをメシアと信じて救われた異邦人やイスラエルの民たちが加わり、さらに「アブラハムのふところ」にいた旧約時代の聖徒たちもよみがえって、この婚宴に加わります。イエシュアがかつて最後の晩餐の席で語られたことば、「あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」(新改訳 2017、ルカ 22:18)とは、キリストの地上再臨によって、再び、主の食卓を囲むようになることを意味していたのです。

●また、御使いはヨハネに、「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい」と言い、「これらは神の真実なことばである」と言いました(黙示録 19:9)。イエシュアが言った「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります」と言っていました(マタイ 19:30, 20:16)。「先の者」とはイスラエルの民のことであり、「後の者」とは教会のメンバー、つまりイエシュアをメシアとして信じたユダヤ人と異邦人のことを意味しています。

●また「これらは神の真実のことばである」のは、救いの長い歴史の中で常に逆らいどうしだったイスラエルの民に対して貫かれた神の真実のことばであるという意味で、**千年王国における「婚宴」(晩餐会)は神の真実を記念する象徴的な食卓**でもあるのです。そしてここにパウロのいう奥義としての「**新しいひとりの人**」(エペソ 2:15)の全き完成があるのです。

